

「死と復活の三度目の予告」

2015年11月10日

ルカによる福音書 18章 31節～34節。イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかつたのである。

主イエスは十字架の死を決意し、弟子たちと共にエルサレムに向かっておられた。時は、イスラエル最大の祭である「過越祭」が近づき、人々が大挙してエルサレムに巡礼する時であった。主イエスは12弟子たちを呼び寄せ「今、わたしたちはエルサレムに上って行く」と話しかけた。そして、三度目になる、ご自分の死と復活の予告をされた。「人の子について預言者が書いたことはみな実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」「人の子」という言葉は通常「人間」を指すが、福音書においては、旧約聖書ダニエル書7章13節～14節の言葉から引用されている。「夜の幻をなお見ていると、／見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り／『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。」ダニエルが見た幻から「人の子」は「メシア（救い主）」を意味するようになった。主イエスがご自分を「人の子」と言ったかどうか疑問であるが、福音書の記者たちは、主イエスを「人の子」と表現している。主イエスは、「人の子」である私は預言者たちが書いた通りに、異邦人（ローマの総督ピラト）に引き渡され、あらん限りの侮辱と暴力を受け、殺される。そして、三日目に復活すると予告したのである。

死と復活の予告は三度目であるが、弟子たちは理解することができなかつた。当然であろう。ガリラヤで慰めに満ちた言葉を語り、力ある奇跡で民衆を救った主イエスが権力者たちに愚弄され、殺される。更に、死の中から復活するなど考えられないことであつた。ルカ福音書は「十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかつたのである」と注解している。弟子たちは聞く耳を持たず、受け入れることができなかつたのである。

事實は、主イエスの予告通りに進み、十字架の死と復活の命の出来事が起こつた。十字架の死は、主イエスが示された愛と眞実が権力者たちによって、抹殺されたということで、世は罪が支配することの明示であつた。ところが、殺された主イエスは三日目に復活した。福音書の記者たちは「復活された」を「起こされた」と表現している。主イエスは暗黒の死へと抹殺されたのではなく、人間の罪を背負い、これを赦し、愛と眞実の命へと「起こされた」のである。弟子たちは復活の主イエスと出会い、この事実を知らされた。主イエスの十字架は罪を滅ぼし、復活は「神と共にある（インマヌエル）救い」であつた。この救いは弟子たちに「隠されてい」たように、今も隠されている。パウロはコリント書(一)1章18節で「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」と書いている通りである。